

Research Results



ピンポン外交による日米中接近に「一字千金」の役割を果たした中日大辞典

国際中国学研究センター (ICCS) 所長・経済学部教授 李 春利

東京大学大学院 博士(経済学)
専門分野は、中国経済論、国際産業論、交通・環境経済学。
本学では「中国経済論」「国際産業論」「グローバル自動車産業論」等の科目を担当。

1971年4月名古屋、世界卓球選手権大会

まずはピンポン外交とは何かをおさらいしておきましょう。1971年春に名古屋市の愛知県体育館で開催された第31回世界卓球選手権大会に、中国代表団が6年ぶりに出場しました。これは日本卓球協会会長だった後藤幹二(こうじ)・愛知工業大学長が、北京を訪ね中国の周恩来首相と会談した結果実現できたものです。大会期間中の米中選手間の交流をきっかけに、米国選手団が中国に招待され、朝鮮戦争以来敵対していた米中の外交が一気に動きました。キッシンジャー大統領補佐官の極秘訪中、続くニクソン大統領の訪中による劇的な両国の和解が世界を驚かせました。さらには、田中角栄首相の訪中により日中国交が樹立されました。名古屋を舞台にした卓球交流から始まった米中接近、日中国交正常化の流れは、冷戦下の世界の力関係を大きく変え、世界史に残る「ピンポン外交」とよばれるようになりました。「小さなピンポン球が大きな地球を動かした」とも言われています。中江要介元中国大使はピンポン外交30周年記念式典の際に、「世界史に残る名古屋発の出来事は2つある。1つは日本の戦国時代、もう1つはピンポン外交だ」と語っていますが、それほどのインパクトがありました。

世界の評価を愛知大学の自信に

日本、中国、欧米にとって、中日大辞典は長らく、代えのきかない重要な書物だったので。私が愛知大学の学生や関係者の皆さんに知ってほしいのはこのことです。初版から中日大辞典の編纂に参加し、のちに編集委員長を務めた今泉潤太郎名誉教授にこのことを伝えると、非常に感銘し喜んでくださいました。8月末に、私は「エズラ・ヴォーゲル 最後の授業―永遠の隣人」と題した本をヴォーゲル先生故人との共著という形で出版しました(本誌P.21 Information参照)。ハーバード大学名誉教授のエズラ・ヴォーゲル先生は、「日中関係史」で10ページぐらい割いて、近衛篤鷹や東亜同文書院、そして愛知大学についても書かれています。地方の私立大学と他共に捉えられがちな愛知大学ですが、見る角度を変え、時には世界から眺めると、独自の価値が認められているものなのです。これは学生には大きな自信にもなります。このような他者の真似できない部分を改めて自己評価し、もっと訴求して国際競争力の向上につなげていくべきではないでしょうか。



「中日大辞典」とは
本学が1968年に初版を刊行した、当時唯一の本格的な中国語と日本語の辞書。東亜同文書院の伝統を継承する中国研究、中国語研究の成果の一端を「中日大辞典」として公表している。2010年に第三版を刊行し、2020年からは「中国語語彙データベース」を公開している。

米中で愛用されてきた中日大辞典

この世界的な「ピンポン外交」の創世記には、実は愛知大学もかかわっていました。米国選手団の訪中希望に対しては、中国側も大変苦労したようです。当時中国のトップにあった毛沢東主席や周恩来首相もぎりぎりまで迷っていたと伝えられています。大会閉会前日の夜、毛沢東による決断が下されたのを受けて、中国外務省から国際電話を通じて訪日代表団に指示を伝えたそうです。当時、国交のない日中の間ではまだ暗号通信システムが確立されていなかったため、傍聴を警戒した中国側が訪日代表団との電信暗号帳として使ったのが、愛知大学の中日大辞典でした。

中日大辞典のルーツは、愛知大学の前身とされる上海の東亜同文書院大学が1930年代から編纂しはじめた『華日辞典』にさかのぼります。敗戦時に接収された約14万枚の中国語単語カードが、当時中国全人副委員長長の郭沫若(かく・まつじやく)氏たちのお取り計らいで、1954年に愛知大学に返還され、それらを元に1968年に刊行されたのが、中日大辞典です。日本最初の本格的な中国語辞典として高く評価され、翌年には中国文化賞を授与されました。こうした経緯を踏まえて、初版から今日まで、中日大辞典は中国側に常に最新版が寄贈されています。それが中国の大学や研究機関、外務省などで広く使われ、中国における愛知大学のブランドを定着させることに大きく貢献してきました。余談ですが、愛知大学豊橋校舎の正門に刻ま

れている「愛知大学」の4文字は、実は郭沫若氏の揮毫によるものです。

実は私も、中日大辞典で日本語を覚えた1人です。また、上海で日本語を勉強した時の先生の1人は、東亜同文書院の卒業生である王宏教授でした。約20年前にICCSが発足してまもなく、研究ネットワーク構築のために訪米した際に、ハーバード、プリンストンなど錚々たる大学で、使い込まれたポロポロの中日大辞典(初版)を見て、「お疲れ様!」と言ってあげたいぐらい感動しました。米国では東亜同文書院や中日大辞典は広く知られているのに驚きました。中日大辞典は欧米でも広く愛用されていたのです。文献を調べると、米国の「ロックフェラー財団」の理事たちが1950年代に二度にわたり、愛知大学を訪問し、「日本で愛知大学ほど中国研究が進んでいるところはない」と評価し、中日大辞典の編纂に対して寄付と支援を申し出たと記されています。

「二字千金」の役割を果たした中日大辞典

縁があつて、2004〜05年と2018〜19年に二度にわたり、ハーバード大学でフェローとして訪問研究する機会がありました。2回目のときに、同大学フェアバンク中国研究センターで「江培柱文存 対日外交台前幕後の思考(江培柱文集 対日外交の表と裏の考察)」と題した本を発見しました。ピンポン外交の際に中国外交官の1員として名古屋に来た江培柱氏の回顧録です。そこには中日

大辞典が電信暗号帳として使われたという驚くべき事実が書かれていました。そこで私は内容を検証し、今年4月と8月に名古屋で開催された2回の「ピンポン外交50周年記念国際シンポジウム」で初めて発表したので。2回目のシンポジウムには、孔鉉佑中国大使が基調講演を行い、私はパネリストとして出席しました。

暗号の手法は単純なものです。中国外務省と訪日代表団がそれぞれ同じ版の中日大辞典を携え、国際電話で例えば「9601右138」と伝えます。それは「中日大辞典9601ページ右段38行目の漢字」を意味しています。実際には事前に決めていた余分な数字も交えて複雑化していたようですが、この要領で「文字ずつ伝え、例えば、遊「請」「美」「国」「隊」すなわち「邀請美國隊」米国チームを招聘する」という文章にしたのだと考えられます。50年前の4月に、「ピンポンの音が世界中に響き渡った」と言われたこの毛沢東の決断は、このように中日大辞典を介して名古屋に届いたのです。

江氏はさらに、「これはおそらく最も原始的で最も解読しにくい暗号通信なのではないかと思う。現在、机に置いてあるこの中日大辞典を見ると、特定の歴史的な状況の下で「二字千金」ともいえる役割を果たしたことを思い出し、実に感無量である。」とつぶやいています。私の発表は、中日新聞朝刊(5月23日)・東京新聞夕刊(5月31日)の二面トップで報じられましたが、その時の編集関係者も「まさに007の世界だ」と言っていました。